

アジアを讀む

29

タイ式政権交代— 確立できない文民優位の原則

する「民主改革評議会」が憲法を停止し、戒厳令を敷いて次々と布告を発令するにつれ、妙な安心感のようなものを覚えてしまった。型通りに進む儀式をみているような安心感である。

バンコク市内の放送局を占拠、戒厳令の実施と憲法の停止、国会と内閣の無効、暫定政府の発足と早期総選挙の実施表明などすべてが過去にタイで起きたクーデターの見本通りだった。

タイでは王政から立憲君主制となつた1932年の立憲革命以来、政権交代の多くはクーデターによつてなされてきた。過去74年間で17回のクーデターが起き、軍市政権の期間は46年も及ぶ。

クーデターのニュースを聞いて大きな驚きはなかった。タイの新聞、テレビがその可能性に言及していたほか、有力政治家が「衝突」との表現で首相と軍部との緊張が高まっていることを示唆していたからだ。

驚きどころか、クーデターを指揮した陸軍司令官ら軍と警察トップで構成

する「民主改革評議会」が憲法を停止し、戒厳令を敷いて次々と布告を発令するにつれ、妙な安心感のようなものを覚えてしまった。型通りに進む儀式をみているような安心感である。

バンコク市内の放送局を占拠、戒厳令の実施と憲法の停止、国会と内閣の無効、暫定政府の発足と早期総選挙の実施表明などすべてが過去にタイで起きたクーデターの見本通りだった。

タイでは王政から立憲君主制となつた1932年の立憲革命以来、政権交代の多くはクーデターによつてなされてきた。過去74年間で17回のクーデターが起き、軍市政権の期間は46年も及ぶ。

あるメディアは頻繁に発生するタイのクーデターを「リセット」（置き換え）と表現した。政治が行き詰まると国軍が登場し、コンピュータの画面を切り変えるがごとくにボタンを押す。4年ごとにクーデターが頻発していることを考えると、不謹慎かも知れないがタイのクーデターはやはり政権交代のためのリセットと思えてしまう。

アジアの現代史の教科書では植民地からの独立や近代化の章で必ず軍部が登場する。インドネシアのスハルト

体制が確立された65年の9月30日事件（共産党のクーデター未遂事件とされる）に象徴されるように、60年代から70年代には軍部のクーデター、軍政がアジア政治のキーワードだった。

ただ、80年代後半以降、冷戦の溶解と経済の浮揚、それに伴う民主化の流れのなかで、軍部の影響力低下、民主主義などが新たな政治目標となり、主要なアジア諸国・地域は着実な体制改革を成し遂げた。韓国、台湾の民主化、フィリピンのマルコス体制の崩壊、時期はやや遅れたものの軍部を背景にしたインドネシアの権威主義的体制も大きく変化した。

軍政、権威主義体制国家には戦後の独立に際し、国軍が大きな役割を果たした国が多い。「銃と血」で独立を勝ちとつたとの自負が軍部に強く、その影響力を無視できなかったため。しかし、タイは一貫して独立を保持したにもかかわらず、なぜ国軍が政治に大きな影響力を行使できるのだろうか。

過去のクーデターをみると、タイ国軍には独特のイデオロギーが染み込んでいる。「防衛と国政」は車の両輪であり、ともに軍が責任を負うべき正当性があるという軍優位論である。政党

過去のクーデターをみると、タイ国軍には独特のイデオロギーが染み込んでいる。「防衛と国政」は車の両輪であり、ともに軍が責任を負うべき正当性があるという軍優位論である。政党

政治も国家の混乱を招くような局面に陥れば、軍が介入しても正当化されるという考え方だ。

クーデターの原因としては軍部と政治指導層との利害の対立の方が大きいはずだが、繰り返されるクーデターにより「軍の政治介入の正当性」が何となく社会から黙認されている雰囲気がある。ただ、軍による介入の程度が行き過ぎると、92年5月の流血事件（スチング軍政への反対運動）のように国民の反発を招く。タイ独特の黒白をはつきりつけない微妙な寛容性が軍に對してもよみとれ、こうした土壌が文民優位という原則の浸透を妨げているのではないか。

しかし、度重なるクーデターによる政権交代は軍管理下の政治体制との印象を与える。要はタイそのものが選挙による国民の意思、議会制民主主義という価値観をどう確立しているかの問題である。軍の介入を許すような政党政治のあり方、国政の主導権に執着する軍部——。政治家、軍のプロ意識の欠如を改めて示したとみられても仕方がない。東洋のデトロイトでのクーデターはもう時代にそぐわない。

日経中国（香港）社 奥村幸広